

高崎の観光 再発見 vol.2 豊田屋旅館

高崎の歴史が 染みこんだ駅前旅館

唯一残された駅前旅館「豊田屋」

高崎駅西口から駅前通りを歩くと、思わず立ち止り眺めてしまう古めいた旅館がある。初めて高崎に来た人なのだろうか、通りから写真に撮っている姿も珍しくない。豊田屋旅館は、高崎駅前のランドマークである。

豊田屋は、明治17年(1879年)に、現在地よりも駅寄りの場所で開業したそうだ。豊田屋が当地に移転したのがいつ頃か、はっきりしないが、現在残されている本館は昭和7年に建てられた。

平成13年に駅前通りの拡幅と区画整理で曳き家されたので、今は、通りから少し奥まり建物の規模も縮小しているが、それまでは、木造の本館と別館、新館が歩道に沿って連なっていた。高崎駅前に、たくさんあった旅館も、往時の面影を残すものは豊田屋が最後の一軒になってしまった。唯一残った豊田屋には、高崎の歴史が染みこんでいる。

「軍都高崎」と駅前旅館

明治から終戦まで駅から程ない場所に陸軍の連隊が置かれ、高崎の駅前旅館は、高崎15連隊の将校や兵士に面会する家族に利用されて忙しかったという。一日中、ご飯を炊いては食事の支度に追われていたそうだ。曳き家の際に解体されてしまった別館には、部屋の中を隠すように半円形の土壁が戸口に巡らされ、室内が見通せないようにした客室もあった。逢瀬か、将校の密談に使われたのか、仲居さんと顔をあわせずに済むようなはからいがされていたのである。

昭和56年(1981年)7月、司馬遼太郎さんは、講演で来高した折りに前触れもなく豊田屋をたずねた。「ごめんください」の声に呼ばれた当主の園原さんは、一



豊田屋旅館

目見て司馬さんとわかり、この時ばかりは驚いた。聞けば戦中、相馬ヶ原と15連隊の伝令として訪れた記憶があるという。「部屋を見せてほしい」と頼まれ、案内すると、「この部屋だ」と何度も柱をさすったそうだ。司馬さんが泊まった「十番」は今もそのまま残されている。

映画のまちと豊田屋

豊田屋の歴史で有名な逸話が、群馬交響楽団の草創期を描いた映画『ここに泉あり』との関わりだ。映画に出演した故・小林桂樹さんと豊田屋旅館が親戚であったことから、『ここに泉あり』の俳優、スタッフの宿舎として2カ月間使われ、桂樹さんと共に岡田英次、岸恵子、加東大介さんら錚々たるメンバーが、ここに泊まった。

高崎映画祭の事務局長だった今は亡き茂木正男さんは豊田屋が大好きで、授賞式に来高した監督や俳優を豊田屋に宿泊させることが度々あった。茂木さんたちは、夜が更けるまで酒を酌み交わすのが恒例だった。豊田屋は、長いこと「映画のまち高崎」の裏舞台でもあった。

